

平城宮建築復原模型

建築物研究室
平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査の成果は着々とあがつているが、残念なことに発見された遺構だけではどのような建築がたちならんでいたのか、一般には理解されにくい。そこで文化財保護委員会では発見された遺構のうち重要なものをえらび、昭和40年度から順次奈良時代そのままの姿を再現した復原模型を製作することとなった。

昭和40年度として、朱雀門・内裏正殿・内裏掘立柱回廊の一部を実物の十分の一の縮尺で設計・製作し、いずれも完成して遺跡覆屋内に陳列している。

製作にあたって予算上は事務局記念物課の直営事業となっており、設計・技術指導等を当研究所が担当した。復原にあたっては、遺跡から得られた資料・知見をもとに、同時代の現存建造物の構造・様式により、学術的に粗漏のないよう文献記録等をも参照した。また、平安宮における同性格の建物を描いた絵巻物等の資料も考慮して矛盾のないようにつとめた。原案・修正案・実施設計とも、平城宮跡発掘調査指導委員のうち建築史専門家の討論・指導のもとに、当研究所建造物室および調査部員が協力して作成した。

朱一、 雀門

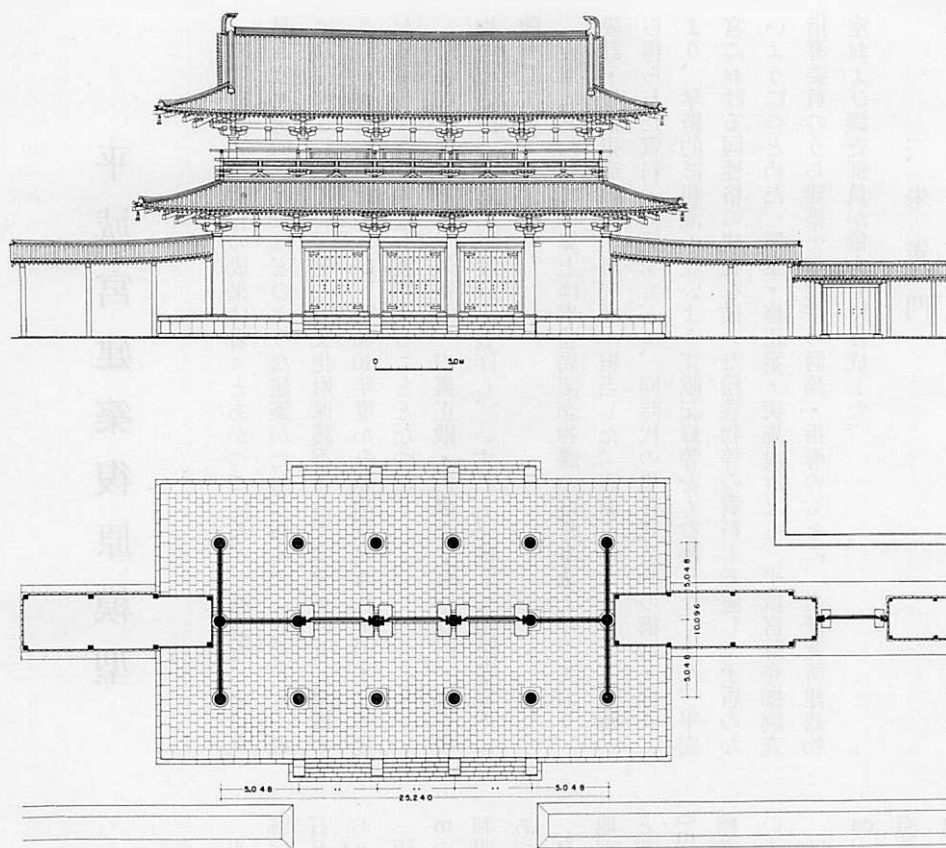
平城宮建築復原模型

平城宮南面中央の正門であり、朱雀大路の正面に開かれていた。遺跡は昭和39年の発掘調査で確認され、中央柱列と北側柱列の碁重な根石が発見された。また基壇の掘込地固めが、地下2mまで築成されており、門の本体が大規模なものであつたことを示していた。

両妻には基底幅 ≈ 60 mの巨大な築地塀がとりつき、門中心から約24mの所で基底幅 ≈ 80 mに細められ、更に脇門をともなっていることも判明した。また特に出土軒瓦の約90%は藤原宮出土のものと同文様であつた。

発掘成果から、朱雀門は5間 \times 2間（17尺等間）で幅三間を扉とし、地固めや根石の碁重なことや平安宮朱雀門の絵などから重層入母屋造と想定した。基壇の出は掘込地固め外側に地覆石がまわるとして約 10 m、基壇高さは東大寺南大門の例などにならつて 15 mとし、外装は標準的な壇上積凝灰岩基壇を設け、基壇石の大きさは平面のほぼ等しい大安寺南大門にならつた。

柱径は東大寺転害門を参考とし全体規模がさらに大きいことから74cm（ ≈ 5 尺）とした。柱高は柱間と等しく5m（17尺）に定め、柱には海竜王寺五重小塔初層柱にならつて胴張りを附した。藤原宮形式の瓦出土量が多いのは、和銅創建の門が延暦まで存続したことを示すの



第1図 朱雀門復原図 正面および平面

で、組物は薬師寺東塔・海竜王寺五重小塔などの初期三手先により、部材は転害門と同様高さ110尺・厚さ9寸を標準断面とした。

上層の構造は建立年代も近く、奈良時代重層門の唯一例である法隆寺中門の資料から復原的に想定した。上層柱径も法隆寺中門の上下層の比例にならない、柱高もその比に近いの6尺にとつた。上層勾欄は架木が台輪よりやや下とすると、地覆下に腰組を入れ背を高める必要が生じ、平三斗とし、唐代絵画に多くみられる人字拱を入れた。平桁・地覆間は横連子とした。上層平面は側面からみた通減が極端になることを嫌い、桁・梁行とも下層より7尺を減じた。

軒反りは法隆寺金堂のごとくゆるやかなものとし、軒出は全体規模とのつりあいを考え下層は17尺・上層は16尺とした。上下両層とも柱に延びを付し桁に反りがでるようにした。屋上には大阪鳥坂寺出土品を参考とした鴟尾を飾り、風鐸は正倉院御物を模した。扉金具は法隆寺夢殿・綱封蔵などの形式を参考とした。すべて部材の継手・仕口は古代建築の実例中で工作上簡単な例にならつた。

模型本体の棟高は約2m強となり、設計・製作には一ヶ年強の日時を要した。

二、内裏正殿

第二次内裏の正殿は昭和37年度発掘調査で判明し、掘立

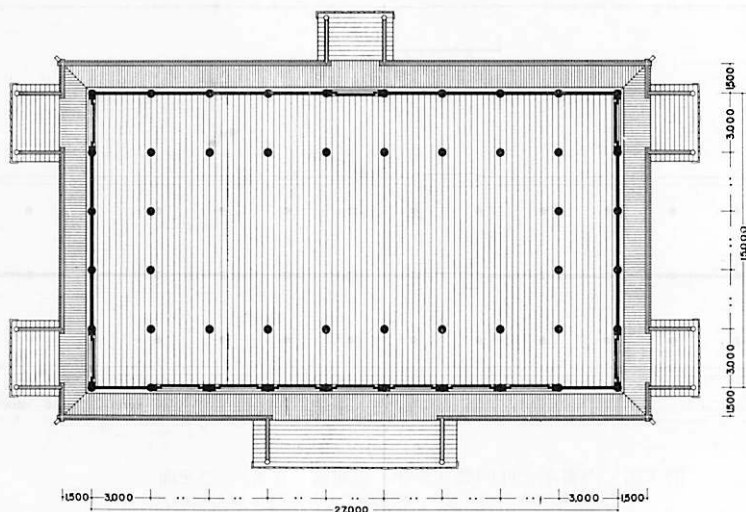
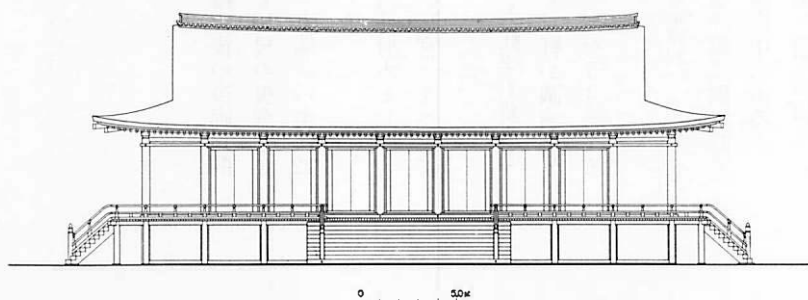
柱9間×5間（10尺等間）の平面で瓦出土量が少ないことから松皮葺と考えられた。基壇はないが、南側に雨落痕跡とみられる溝があり軒出を推定できた。床東・縁東の痕跡は遺構の重複などで不明瞭であったが、平安宮紫宸殿を参考して、高床で周囲に縁がある想定した。

柱径は遺跡から40.5cm（1.6尺）と推定し、柱高は床上で径の10倍・16.5尺とした。床まわり高さは階段を蹴上げ7寸×11段とし、縁高は7.6尺、床高は8.5尺となった。床構造は法隆寺伝法堂にならい、大引と束のみで根太のないものとした。縁は簀子小口縁とし、勾欄斗束は薬師寺東塔にならい、敦煌壁画などを参照した。擬宝珠は東大寺大鐘上の宝珠を参考として設計した。

平面について戸口と階段の位置は平安宮紫宸殿にならい、扉まわり細部は伝法堂によった。

小屋構造は身舎梁間が三間と広いことから同様の梁間をもつ新薬師寺本堂のごとく又首組により、組物も同堂と伝法堂などにならつて大斗肘木を用い、垂木は地門・飛角の二軒で、軒出は遺跡の資料から7.7尺とした。

棟は瓦積とし、葺瓦は内裏地域で多数出土し、特に瓦当面径の小さい軒円瓦633A型・軒平瓦663A型をもちいた。松皮葺については古代の実例が残つ



第2圖 内裏正殿復原図 正面および平面

ていないので、法隆寺伝法堂・七丈屋等の部材痕跡と文書にみられる資料とから、垂木上に粗い野地を組み松皮をしばらくつける工法を想定した。松皮の長さは3尺のものを考え、葺厚は延喜式により6寸とし

て施工した。

六葉金具は、宮跡から出土した木製六葉の形にならった。

設計と製作とで約10ヶ月を要した。

内裏掘立柱回廊

今年度は正殿をめぐる内郭掘立柱回廊のうち、正殿背後の復廊14間分を製作した。昭和36年度の発掘調査で桁行梁間とも10尺の復廊として発見され、その後の調査で東西棟複廊は全長27間、東端から南に22間の単廊が延び内裏築地回廊に接続することがわかった。

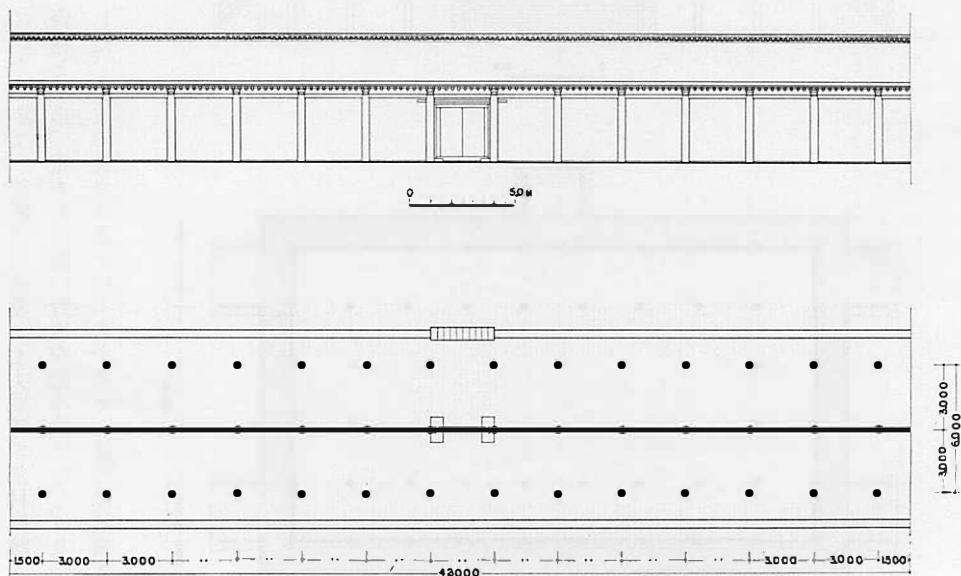
遺跡から柱径は36cm大斗幅もこれに従い、組物は大斗肘木とした。中央柱通りを壁で閉じて連子窓を用いず、内裏前半と後宮とをへだてるものと想定し、出入口は中央と両端のみに開くようにした。

小屋構造は法隆寺東大門、東大寺転害門にならない大虹梁上簷股・三棟造で、棟木は束で支えることとした。軒は一軒か二軒か議論が分かれたが、一応内裏内郭を二軒で統一した。地垂木勾配を5寸とするため、簀股をやや大きい目のものにする必要が生じた。

設計・製作に約六ヶ月用いた。（「尺」はすべて推定造営尺）

なお、昭和41年度としては内裏内郭の東第一殿および第二殿、掘立柱回廊東半の残部と南面築地回廊、朝集殿を設計・製作中である。

（細見 啓 三）



第3図 内裏掘立柱回廊（部分）復原図 正面および平面